



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第18号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2011-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73503
Type	journal
File Information	DRFmonthly_18.pdf



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

18号

No.18, July 2011

特集1：営業活動のススメ

特集2：平成22年度CSI委託事業報告交流会
(コンテンツ系)

その他の記事

- ・海外レポート
- ・教えてDr.F
- ・参加機関紹介（神戸大学Kernel）

特集
01

営業活動のススメ

「北風と太陽」という有名な寓話があります。どちらが旅人のコートを脱がせられるかを競ったところ、北風がどれだけ激しく吹きつけても頑なに身を閉ざした旅人が、太陽の光を浴びるとその暖かさから自らコートを脱ぐというお話。義務化や点数化など制度的な追い風がどれだけ吹こうと、機関リポジトリのステークホルダーである教員が自らコートを

脱ぐことがなければ、リポジトリの未来にとって好ましいこととはいええないでしょう。

オープンアクセスの意義を伝え、教員の自発的参加を促すべく、今日も全国各地で様々な営業活動が行われています。今回、その中でも「太陽」のように明るく元気な取り組み事例をご紹介します。

営業活動アラカルト

研究室訪問

図書館から飛び出して、研究室に足を運ぶのは、「図書館利用者」としてではなく「研究者」としての教員と対話するため。リポジトリの広報普及活動にとどまらず、教員ニーズの真相に迫る絶好の機会。「口」以上に「耳」の役割が期待されることです。教員のどんな小さな声も、サービスに反映する努力を忘れずに。



カフェイベント

OAをカフェ形式で語りませんか。個別営業だけではなく、複数の、特に若手の先生方や院生さんとも知り合うチャンスです。先生方にはご自身の専門をお話してもらい、図書館からはオープンアクセスの現状などについて話題提供。あとはフリートークです。7月16日は今年のオープンアクセスウィーク(OAW, 10月24-30日) 開始の100日前。カウントダウンをしつつ、OAWに向けてカフェの準備をしましょう。お茶とお菓子さえあれば学内ですぐ開催できますよ。



ILL

遠隔利用者に文献を提供するという点で、ILLと機関リポジトリは等価なサービス。しかし、機関リポジトリには、利用者が登録文献を無料かつ即時利用できること、著者が利用統計を取得できること等、ILLにはない特長があります。教員が文献複写を依頼してきたら、そのメリットを伝達しリポジトリに誘導するチャンス。到着文献の封筒に広報資料をしのばせるなど、手軽に実践できかつ効果的な方法です。



教員インタビュー

リポジトリに登録経験のある教員に、そのメリットや自身の研究内容をインタビューし、その内容をニュースレターやホームページで紹介する、一連の取り組み。広報活動の一環として行われますが、教員からサービス向上につながるフィードバックを得られるチャンスでもあります。1000件目といったキリ番に依頼すると、インタビューに臨む教員の心境もまんざらではなくなります。



祝
1
0
0
0
件
目

食堂

キャンパス生活において、教員が最も寛容になる時間、それはたぶんランチタイムではないでしょうか。その意味で、食堂は格好の営業スポットであるといえます。テーブルに三角スタンドなどを置いて広報するのも手ですが、職員自ら食堂に出向き、目当てる教員に合席を迫ってみるのも、たまにはよいでしょう。大丈夫。「今ちょっと忙しいので…」なんて言われませんか。



Case 01

小樽商科大学

小樽商科大学附属図書館 学術情報課図書係
南 絵里子

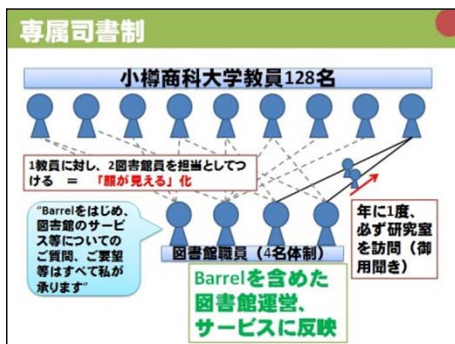


Q どんな営業活動を行っていますか？

Barrel (小樽商科大学学術成果コレクション) を設立した年は、日ごろから図書館を利用している教員へのヒアリングや全ての学科会議で15分程度の時間をいただいていた説明会を行いました。説明会では教員の著作リストを配布しリポジトリへ登録可能な文献に○をつけて提出してもらいました。著作リスト作成を担当した職員が、その教員の担当となり著作権の確認、教員との連絡、登録等のすべてのリポジトリ業務を受け持つというマンツーマン体制をとってきました。ほかにはメールでの文献寄贈依頼や新任教員対象の説明会を行ってきました。

昨年から「専属司書制」(下図参照) をスタートさせました。これは今までのマンツーマン体制をさらに強化したもので、一人の教員につきメインとサブの二名の担当者をつけ、Barrelだけではなく図書館のサービス全般についてその教員をフォローするというものを行っています。具体的には、年一度程度を目標に研究室訪問(御用聞きと呼んでいます)を行い、まだBarrelへ登録していない文献の抜き刷りを回収したり、図書館の新しいサービス、講習会、イベント等について情報提供し、図書館へのご意見・ご要望を伺うというを行っています。

昨年は50名の先生の研究室を訪問し70件余りの文献を集めることができました(実際にBarrelに登録できたのは、その半分程度)。今年は、昨年のノウハウを活かし、さらに充実した御用聞きを行います。



Q 営業活動をする上で参考になった本はありますか？

阿藤 治夫(2005).
“機関リポジトリを軌道に乗せるためすべき仕事 ―千葉大学の初期経験を踏まえて―”. 情報管理. Vol. 48, No. 8, pp.496-508

Q 営業活動において留意すべきことは？

本学では教員が128名しかいませんので、一人一人を大切に、と思っています。また、営業活動時のみならず普段から教員との良好な関係を保てるように心がけています。あと自分自身が楽しむこと。

Case 02

高知工科大学

高知工科大学附属情報図書館
北村 多樹子



Q どんな営業活動を行っていますか？

リポジトリ業務に多くの時間を割くことはできないので、日常業務の中でできる小さな営業活動を行っています。

ILLでは、文献複写物と一緒にチラシをお渡ししています。IRCuresILLプロジェクトで配布されたもの[*1]と、担当者が作成したチラシを入れています。このチラシを見て文献を提供くださった教員もいらっしゃいます。

カウンターを担当している時も、今までに文献をご提供していただいた教員に声がけをしています。その場限りになることもありますが、次の文献提供に繋がればラッキーです。学部全員に営業をかける! と考えるとちょっとしんどいですが、できる範囲からやれば良いかなと。教員とお話することで、館内のミニ展示会やベストセラー図書の選書について等、他の話題でも情報交換ができて図書館業務にプラスとなっています。

教員業績にある論文一覧を参考に、出版社版の原稿が使える文献を中心に営業メールを送ることもしています。許諾をいただいたら、同じ雑誌に掲載されている他の文献もこちらで手続きしますよと許諾の可否を伺います。出版社版の原稿が使えるとほぼ掲載OKなのですが、著者稿が必要なときはそこで途絶えることもしばしば。そこからどう繋げていくかが課題です。

昨年度、初めてインタビューを行いました。リポジトリの登録件数500件目の記念です。3月で退官される教員でしたので、翌年度の文献提供に繋がるものではありません。しかし、営業活動に尻込みしていた自分の意識を変える大きな出来事でした。教育者・研究者として長い年月を過ごされた中でエピソードや、教育・研究に対する思いを拝聴して、モチベーションが上がりました。

Q 営業活動において留意すべきことは？

営業活動には事前準備が必要です。文献ください! の営業のときは、執筆論文の情報、投稿誌の著作権の許諾状況は調べておく必要があります。実際よく尋ねられます。インタビューの前には、さらに先生のホームページや論文にも目を通しました。内容は分からないながらも関連している話題がありますので、話のきっかけになりました。

リポジトリ開始当時は一人で担当していましたが、現在は二人で担当しています。そのおかげで営業活動もできるようになりました。なにもかも一人でやるのは大変なので、小さなことから始めて、継続していくことが大切だと考えています。千里の道も一歩から!

*1 <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/oawweek/ppt/oawleaflet.ppt>

Case 03

信州大学 「視認度評価分析システム」

信州大学附属図書館 情報システム担当
遠藤 豪



信 州大学機関リポジトリは信州大学(以下、本学)における『知の泉』として、学術情報の公開・発信と、研究者への研究活動支援を目的とし、学術雑誌、図書、論文など必要な情報へのアクセシビリティ強化のため、本学で生産された多様な学術成果物を整備・収録し、次の研究活動へと活かしコンテンツ増による好循環を回すため尽力してきました。

しかし2009年度は+5,807件(+248.9%)だった増加件数が、紀要選及登録の完了、C S I 委託事業予算終焉、負荷問題などを要因として、10年度は+1,745件(+21.4%)へと鈍化しました。

こうした中、本学では『視認度評価分析システム』を導入し、登録コンテンツの量から質への転換を図りました。『視認度評価分析システム』は、機関リポジトリ登録論文へのアクセス数を分析し、著者、管理者へ可視化し提供するツールです。

同システムの個人別統計は研究評価のツールとして研究活動や論文の多角的分析(論文ダウンロード数、被引用数、アクセス経路、キーワード別検索数)が出来るなど、研究の方向性を決める際に有効であり、著者のモチベーション向上につながっています。一方、組織別統計では、学部学科単位で、あるいは大学での注目論文は何か、何が読まれているのか把握可能となります。管理職にあたる研究者からは、「機関リポジトリへ参加し

た後は更にダウンロード数が増えており、学科・学部の広報・戦略に役立てる事が出来る」という意見もありました。また、コンテンツへのアクセス傾向の分析により、高二次と判明した医・理工系分野のWoS掲載論文、医学臨床系、教育学分野での新規登録に集中(本年度新規登録全体の約70%を同分野で実施)し、結果、登録件数ではランキング圏外ながら、ダウンロード数は前年比約5倍(24.9万件→123.6万件(+396.4%))全国の国公立大学中14位(※週刊朝日進学MOOK「大学ランキング2012」P113)へと躍進しています。

機関リポジトリへの登録では、ニーズの実態分析と、そこへ資源を集中し“質”を狙った(医療分野の紀要公開承諾交渉のため病院を訪問、リポジトリ認知度向上のため理学担当教員への記念インタビュー実施、WoS高Impact Factor・高被引用数の論文公開のため、専任人員を雇用し登録にあたる等)活動が、人員に限られ、登録出来るコンテンツにも限界がある中でますます重要になってくると考えます。

今後も、頭はクールに、ハートは熱く、視認度評価分析システムの安定運用と、アクセス経路の解析機能強化や、アクセスログ解析の信頼性向上などをスパイスとしながら活動を続け、ニーズの高い研究成果の発信をしていきたいと思っています。

Case 04

北海道大学

北海道大学附属図書館学術システム課
城 恭子



Q どんな営業活動を行っていますか？

1. 会に行ききっかけづくり

「研究室訪問・いいとも作戦」

- ①HUSCAPに積極的に協力してくださる先生2名と院生さん1名にまずインタビュー
- ②インタビューした相手に、次に訪問するとよい研究者を紹介してもら（できるだけたくさん）
- ③「〇〇先生から先生をご紹介いただいたのですが、お話を伺えないでしょうか？」とインタビューをお願いする
- ④②と③を繰り返す

「図書館委員の先生にアプローチ作戦」

- ①図書館委員を務めておられる先生にHUSCAP理解者になってもらう
- ②先生の所属する学部ごとの事情に合わせた効果的なHUSCAP拡充策をご相談する

2. インタビューの心得

基本的に先生方はお話ししてくださるのが好きな方が多いです。アポイントを取るときは、「10分20分お時間をいただけないでしょうか？」というふうをお願いするのですが、大抵は軽く時間をオーバーし、最長では1時間半お付き合いしてくださった先生もいらっしゃいました。

あらかじめ先生の業績について出版社ポリシーを調べたリストを持って行くと、営業にも効果的ですし、話のきっかけにもなります。

単なるHUSCAP営業活動だけではなく、HUSCAPや図書館に関するご意見、ご専門の研究分野について、研究活動について、幅広くお話を伺っています。実際のところ9割はHUSCAP以外の話をしていくような…

Q 教員からのフィードバックをどのようにサービスに活かしましたか？

1. セルフアーカイブ用WEB投稿フォームを作成

HUSCAPへの投稿はメールで受け付けていますが、「雑誌のオンライン投稿フォームのようなものがあれば、抵抗が少ないのでは」という声を受けて、WEB投稿フォームを作成しました。DOI・PMIDを入力すると書誌事項を自動セットできるなど、研究者の入力の手間が軽減されるようになっており、好評をいただいています。ツールはDRFホームページでも紹介されています。

セルフアーカイブ用WEB投稿フォーム

Google 検索

2. WEB利用統計ページをさらに快適に・情報も充実

「WEB利用統計画面が重くて、読み込みに時間がかかる」という声を受けて、仕組みを大幅にリニューアルしました。さらに、論文ごとのダウンロード数に加えて、どの国から、どの組織から、どんな検索語で、どんなサイトからアクセスされたかを確認できるようになりました。

Q 教員とふれあう・つながる方法・アイデアについて教えてください。

1. 理由は何でもいので、とりあえず会に行く

▼ HUSCAPの過去の事例

- ・スキャン用に冊子体を貸して下さることになり、訪問ついでにインタビュー
- ・ファイルが大き過ぎてメールで送れない！という連絡があり、USBを持って伺ったついでにインタビュー

2. オリジナルグッズをプレゼント

HUSCAPのエコバッグを作成して、インタビューに応じてくださった研究者にお礼として差し上げています。意外に好評です。

Q 営業活動をする上で参考になった本はありますか？

『自分の小さな「箱」から脱出する方法』

アービンジャー・インスティチュート著、金森重樹監修、富永星 大和書房 2006.11 ※続編も2冊出ています。



● HUSCAPエコバッグ



● 『自分の小さな「箱」から脱出する方法』



国立民族学博物館
情報管理施設
情報サービス課長
高橋 安司

リポジトリとの出会い

もご一緒に、私にとってそれは、使者というより使徒の襲来ともいえるべき危機的状況に感じられたものです。

土屋先生は、館長室に入るなり上着を脱ぎ、汗だくのワイシャツの袖をまくり、お茶をグイッと飲みすると、前置きも前振りも世間話すらなく、単刀直入に「何故構築が遅れているのか」とATフィールド全開で迫って来ました。私の持つロングノーズの槍なんぞパチモンですから、屁の突っ張りにもなりません。すでに上司とのアンビリカルケーブルは断ち切れ、非常用内部電源のみで戦う私に勝ち目はありません。使徒ツチャは、私のしどろもどろの返答なんぞ

軽々と跳ね飛ばし、何が問題か状況分析をしてくださり、次の手、今後の方向性を指示し、アルジャーノンの死に己の行く末を悟ったチャーリー・ゴードン然とした私を残し、颯爽と去って行かれたのでした。

村上先生はというと、哲学系の研究室・教室はそれぞれが一国一城の主、研究者は発表の場を求めているから（話は付けておくし）訪ねてごらんない、一人と繋がりを持てれば後は芋づる式、との温かいお言葉を残され、我々が第3新首都市の復興のきっかけを与えてくださいました。

こうして、すべてはゼーレのシナリオ通り、リポジトリ補完計画は遂行されていったわけですが、私はその後の勃興を見ることなくセカンドステージへと進み、今に至ります。

こ れは村上祐子先生（現東北大）との出会いにもなるのですが、おおよそ5年ぐらい前のこと、私は、とある大学図書館で機関リポジトリの構築も担当していました。引き継ぎらしいことは無く、何をどうしているやらさっぱりわからず、考えあぐねていた時のことです。NIIから、「構築が遅れている事情を聴取する」ために、使者を送るとの連絡が入ったのです。それがなんと、あの、人も羨む土屋俊先生だったのです。さらに村上先生まで

Column

報告交流会も6年目を迎えました。委託機関の数は厳選され、参加者の顔ぶれもかなり変わりましたが、会場にあふれる熱気と笑顔には変わりなく、発表を真剣な面持ちで聞き入り、合間には多くの交流がもたれました。各セッションの内容を凝縮して報告します。

Session.1 萌えるリポジトリ

萌えいつる若葉は、やがて生い繁る緑へと

委託事業領域1より、著しい成果があった大学のご報告をいただきました。大学によって事情に違いはありますが、身近なヒントにあふれたセッションでした。

(新潟共同) 全面サポートつき共同リポジトリ、(信州共同) WEKO初採用共同リポジトリ、(滋賀大)「近江商人」など地域の特色コンテンツ、(城西大) 投稿料申請時に電子ファイル提出を義務化、(聖学院大) 他部署と連携しさらにそれを励みに、(奈良大)「たまたま」「片手間」意表をつくキーワードで力づける。マニュアルも公開、(広島共同) 参加大学特有コンテンツが彩る共同リポジトリ、(核融合研) 意思決定を現場担当者から分離



Session.2 ポスターセッション

いくら時間があっても 足りません 足りません

24機関、14プロジェクト、合計38枚のポスターが展示されました。ポスターを見ながら、あるいはポスターと関係なく、あちこちに人の輪ができ、時間いっぱいギリギリまで話を続ける姿が見られました。



Session.3 試されるリポジトリ

リポジトリでは、こんなこともやっています

委託事業領域2の8プロジェクトの発表は、技術的に高度な部分も含み難く感じることもありましたが、目も見張る部分があり、まさに先導的でした。(番号は発表順)

1) ハーベストとSWORDデータ更新によるオーバーレイ・サブジェクトリポジトリ、2) 博士論文登録に関する東大の経験を伝える資料・ツール公開、3) 教員へのアプローチを効率よく。書誌情報取出・著作権情報確認をシステム化、4) XooNIPS利用機関中心コミュニティによる構築支援と次世代XooNIPSの開発、5) DSpace 1.6の機能と科研費番号で、著者同定識別子の利用拡大へ、6) クラウドサーバのノウハウとOJS電子出版スターキット計画、7) 真のアクセスログまで皮剥きではなく、共通基準検討のためのROAT、8) 小部数発行報告書の約1/6電子化。灰色資料をグリーンにする 遺跡資料リポジトリ



学内に、教員に、学外へ、学協会へ
さまざまなコミュニティ！

Session.4 つながるリポジトリ



図書館連携作業部会WG2からの発表は、セルフアーカイブの義務化やリポジトリの比較の指標など、多くの示唆を含む発表でした。委託事業領域3の5プロジェクトは、もはや業務に欠かせないSCPJの学協会への広報やデータ更新の努力が伝えられ、おなじみのDRFからはML・Wiki・月刊DRFと合わせ、海外で絶賛されたhita-hitaなどの紹介がありました。近畿コミュニティ形成・地域リポジトリ・担当者人材育成の発表では重なる部分も多く、それぞれの研修会の報告や参加者の声などが伝えられ、地域におけるサポートコミュニティの必要性と、そこから人材育成へのつながりを意識させられました。

Session.5 パネルディスカッション「クラウド時代の機関リポジトリ」



ついに明かされる、
NII クラウド型 共用リポジトリ

各パネリストからデータの保存などそれぞれの立場での発表があり、多くの大学が興味を持っていたNII共用リポジトリの、今後のスケジュールやサービスについて、NII安達先生より現時点で決まることが公開されました。会場からの絶え間ない質疑応答の中で、WEKOを使い無料提供を予定するクラウド型共用リポジトリにおける、バックアップ・セキュリティ・人材育成を視野に入れたコストが話題にあがり、機関リポジトリの活動の持続のため、サポートコミュニティ維持の重要性が繰り返されました。

Special Column



クラウド時代の機関リポジトリという言葉から連想される内容は人によって様々だと思います。今回機関リポジトリのデータ分散保存や、国立情報学研究所が用意しているクラウド型共用リポジトリのスケジュールなど具体的な要件について話題提供があった訳ですが、パネリストによってクラウド時代なるものをそれぞれの角度から捕らえています。これは即ちこの標語についてそれぞれに自分の抱くものの実現を期待している状況にある事を示しています。だからその中から自分の機関又自分自身が最も切迫と思うテーマを追求されるのがよいでしょう。私自身、最も大切な事は国に一つの大規

模な機関リポジトリのプラットフォームを持つ程にこの国の大学図書館界に普及してきた機関リポジトリとその時代という観点から最も重要だと感じており、DRFのようなコミュニティを命とする組織においてこそ実効性のある提案とそれを受けて現実に実施する行動力があると信じております。先端とか革新的とかいう評価は飽達結果としてついてくるものであり、予め気にしなくてもよい事です。今我々にとって大事なことは、機関リポジトリの担当者として次のステップに踏み出さないといけないという事であり、それは皆さんがそれぞれに感じている課題を夢想することを卒業して行動することに違いないと思っています。

大阪大学附属図書館 前田 信治



Austin, Texas USA 2011.6.6 - 11

Open Repositories 2011



北海道大学大学院理学研究院数学部門

行木 孝夫 准教授

OpenRepositories2011に参加すると知られてしまった途端に原稿依頼が飛んできましたので、印象に残った発表からいくつか紹介します。まず、日本でも通用すると思われるものからSimeon Warner (Cornell Univ.) のDon't Bold the Field Nameを。機関リポジトリに限らず、**Title: Don't Bold the Field Name** などという形式をよく見かけます。でも、強調すべきはタイトルそのものなので、**Title: Don't Bold the Field Name** とすべき。それならフィールド名は不要だろう。フィールド名が必要になるのはDOIであるとかISSNなどに限るべきだ、という内容で聴衆の爆笑のうちに終わりました。Simeonは翌週のJCDL2011-DRのオーガナイザーでもあり、関連する議論もできたのは幸運。

Communityセッションでは、地域ベース、国ベースのリポジトリコミュニティを成長させる試みに関して6件の発表があり、問題意識などはどこも同じであるという印象を受けました。DRFの活動やポータル研修などを含め、ここで発表したとしても違和感はありません。

日本では対応が立ち遅れていると思われる内容について、Linked DataやData Repositoryに関する発表が多く、今回はこちらが主流であったように思います。両極端に属するこれらの内容を一箇所に集めて破綻しない懐の広さは認めなければなりません。



▲会場の様子



▲ポスター発表会場（日本から6件参加）

Ottawa, Canada 2011.6.16 - 17

Digital Repositories and Field-Specific Digital Libraries



九州大学大学院

システム情報科学研究院情報学部門

池田 大輔 准教授

6/13~17日にオタワ大学で開催されたACM/IEEE Joint Conference on Digital LibrariesのワークショップDigital Repositories and Field-Specific Digital Libraries(6/16, 17)に、行木先生と連名で日本の数学分野のリポジトリ構築に関する発表をするために参加しました。発表件数は13件、参加者は講演者を含めて23人で、小さいけど密で活発な討議が印象的でした。多くは分野に特化したリポジトリ(Disciplinary Repository; DR)の紹介で、arXivやPubMedなど長い利用実績と利用者を持つものがほとんどでした。

我々の発表を除き、IRという言葉はほとんど現れませんでした。これは、DRと一言にいても、実際にはプラットフォームとコンテンツを持つものとプラットフォームのみのモデルに分けられ、前者のモデルが主流だからでしょう。

前者ではIRは不要で、あるDRに至っては、特定の機関の論文へのアクセスログを機関に開示するサービスを試行しています。今後、機関がDRに依存する状況も発生するかも。一方で、コンテンツ丸抱えと技術要素の開発費はコストが高く、Big Scienceでない限り厳しいのではないかと思います。さらに、プラットフォームの要素技術は類似しており、分野特化の必要性はなく、実際の分野の拡張が起きている。

後者のモデルの例は経済学などの分野リポジトリで、一種のポータルです。DRは機関に対してトラフィックを、IRはコンテンツを提供し、相補的な関係で、Small Scienceでは、このようなモデルが求められるのではという思いを新たにしました。我々の構築したDRでは、さらに、DR側で補強したメタデータをIRにフィードバック可能で、より直接的なメリットを機関に提供します。



(写真上) 筆者

(写真下・左) 会場の様子



Dspaceでは、メタデータ項目毎に言語指定ができるようになっています。データを一括登録した際、項目の値が日本語・英語に関わりなく自動的にen_US(英語)がふられるのですが、このままでは問題でしょうか。業者に問い合わせると問題ないといわれましたが心配です。

relation.isversionof	http://ci.nii.ac.jp/naid/110002686839/	en_US
rights	全国大学国語教育学会	en_US
rights	本文データは学協会の許諾に基づきCINiiから複製したものである	en_US
title	1.構造的認識力の実証的検討: 説明的文章の学習指導を中心に	en_US
title.alternative	1. コウソウテキ ニンシキリョク ノ ジッセンキ ケントウ センメイテキアノショウ ノ ガクシュウシドウ チュウシンニ	en_US
type.nli	Journal Article	en_US
identifier.jtitle	全国大学国語教育学会発表要旨集	en_US
identifier.volume	95	en_US
identifier.page	5	en_US
identifier.epage	5	en_US
rights.textversion	publisher	en_US
出現コレクション:	a.1.1 学術雑誌掲載論文	

A 各項目の「言語」は、率直にいうとその項目の値が何語で書かれているかを示すものじゃ。en_US となっていれば、それは「アメリカ英語で書かれています」と宣言していることになる。もしその項目値に平仮名など入っていたら、端的には間違いじゃな。それはそうじゃが、おそらく質問者の関心は、実害がどれくらいあるかじゃろう。考えられる実害の1つとして、同じ文字あるいは同じスペルでも複数の言語で違った意味になることはありえる（ヨーロッパ文化圏、漢字文化圏などじゃ）。この場合、正しく言語を指定しないと正しい意味が伝わらん。もう1つは、機械的な収集や検索などを行う場合、言語をキーにすることもあると思うんじゃが（例えば、日本語のdescriptionだけを検索する、などじゃな）、それがうまく働かなくなることじゃ。これらが主な実害の可能性ではないかの。

Dr. HUSCAP | ありや、DSpaceが、OAIS参照モデル準拠とかLibrary Application Profile 準拠とか、いかにもちゃんと設計されているようイイ子ぶる一環として“一応設けてみました”程度のもんじゃないかの。事実、肝心のメタデータ交換（メタデータハーベスティング）の際にも反映も表現もされとらん。高品質なメタデータを持つに越したことはないが、維持コストとの見合いじゃの。だいたい、通常入力画面で入らず、いちいち詳細画面でメンテせんならんとは何事。いずれヒマができたら一括変換でも考えてみるかの。ああ忙しい。

Dr. Barrel | うちも同じじゃ。んなこと気にかけるヒマがあったら1件でも多く登録せーい！

DRF 参加機関 紹介



[カーネル] Kernel 神戸大学学術成果リポジトリ



カーネル君
[イノシシ科]

Q1. 担当課担当係と運営体制をおしえてください

情報管理課電子図書館係の係長、係員、事務補佐2名（いずれも兼任）で担当しています。他にリポジトリWGを置いています。

Q2. 導入システムは何ですか？

InfolibDBR。他にキク科の染色体数DBや、大学文書史料室の公文書DBをはじめ、いくつものDBをこの上で動かしています。

Q3. 公開時の苦労話や秘蔵話、他機関と違った活動などをぜひ。

公開前の全教員アンケートで「登録を希望する」が8割を超すなど、先生方の感触もよく、年間1000件以上の学術雑誌論文を登録できると見込んでいたのですが、甘かったもようです。昨年、公開4年ではようやく登録数1000件を達成できました。Kernelの広報のため、研究室訪問など色々試していましたが、ある日ふとツイッターの利用を思いつきました。まずはターゲットを広く学内外の研究者と決め、マウスが壊れるまでフォローしました。神戸大学がこんな資料を公開しているとRTされた時はうれしかったです。今は学内の研究者と、神大の学生を中心にフォローしています。大学や附属図書館のHPニュース欄等

もちろん活用していますが、ツイッターはインタラクティブな広報手段だと感じています。ところで『国民経済雑誌』という、百年以上続く学内学会の雑誌があります。総論文数約1万件、執筆者数1200人（推定）のこの雑誌を公開するために、約4年がかりで電子化と許諾問い合わせを行いました。この経過は語るも涙の物語だったのですが、「震災文庫」への問い合わせによると、3月の地震以来、いくつもの公開論文が地方自治体の復興計画の参考となったようです。直接利用者のお役に立てた好例でした。様々なチャネルを通じて、研究者に限らず色々な層にアピールし、利用されていくことによって、リポジトリを活性化していけたらいいと思っています。

Q4. Kernelのチャームポイントは？（ここが気に入っているとあったところを）

掲載誌の一覧が見やすいと思っています。これ、もともとは職員のお手製です。よく使われているDSpaceとは全然違うシステムのため工夫が必要な反面、私たちの意図通りに設計できました。

Q5. DRFに期待することは何ですか？

DRFの存在によって、リポジトリ活動の情報共有が大幅に進んでいると思います。今後も日本の図書館全体を活発にする存在であってほしいです。



カーネルバッグ

次号 予告

特集：コンテンツ可視性向上計画

リポジトリに登録されているコンテンツはどのようにしたらより多くの人に見てもらえるのでしょうか？その方法を探ります。

編集後記

今回、意図せざる夏の特大号になりました。6頁にわたる誌面編集にご協力いただきました諸氏に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。